

寺子屋プロジェクト和尚さんのお話 第8回 「看話禅と黙照禅」

臨済宗で用いられる公案の話を中心に、臨済宗の看話禅および曹洞宗の黙照禅の話です。

公案は、修行僧が師家(老師)から与えられ、修行し参究する問題のことですが、臨済宗では1700則あると言われていています。

「公案」は、元々中国の役所(公が)発行する文書(案といわれた)に由来するそうですが、禅宗における公案は、時代に応じて取り扱いに変遷がありました。

今でも、修行僧は公案(課題)を与えられ、坐禅修行や作務に取組み、老師から許されるまで、何度も何度も参ずるのです。

中国の唐の時代は、公案は論理的な側面を残して後進の指導に使われていましたが、宋の時代になると、公案を突き詰め突き詰めして自分を追い詰め、あるとき忽然と「脱ける」ことが目指されました。

例えば、中国に知識豊かな賢いお坊さん\*注1がいました。

この方が師匠から公案を与えられ何度も応えましたが、先人の<sup>けんげ</sup>見解の模倣だと追い返されました。自分は悟れそうにない、僧侶にはなれないと言って、祖師の墓守になってしまいました。 \*注1 <sup>きやうげんちかん</sup>香巖智閑禅師;以下、香巖撃竹の故事から

祖師の墓の掃除で毎日を送るうち、ある時、箒で掃いた石ころが竹にあたって、「カーン、カーン」と音をたてるのを聞いたその瞬間に、「脱けた」すなわち「悟り」を得ることができたそうです。

因みに、白隠和尚は鴉の鳴き声を聞いて、お釈迦様は明けの明星をみて悟りを開かれたとのことです。

ところで、こうした公案を重んじ、老師との問答を重視する臨済宗の看話禅に対し、曹洞宗の黙照禅があります。両者の対立は、矢張り宋の時代に始まり、以下の理論的な対照は現在の日本まで継続しています。

曹洞宗:<sup>こうち</sup>宏智禅師の主張、「仏性は本来的にすべての者に具有されており、坐禅自体が坐禅の目的であるような自己完結的な禅法の中でそのことに気付くことこそが悟りの要。」

臨濟宗：大慧<sup>だいゑ</sup> 禪師の主張、「公案を用いることによって言語による思考に大きな疑問を抱えつつ、その疑問を打ち破ることにより悟りへ向かうのが正しい禅法。」

黙照禅の立場からは、看話禅が <言語を用いること> <悟りと迷いの二律背反を措定すること\*\*注2> を嫌うのでしょうか。なお、中国には、臨濟宗（と浄土宗）が残っているのみです。

### \*\*注2 迷い(煩惱)と悟り(菩提)について

「男女の愛憎は、煩惱であり痴情であるかもしれない。しかし、その痴情を根絶してしまつたらおそらくヒューマニズムも同時に枯渇してしまうだろう。腹をたてることは、愚痴であり罪業であるかもしれない。しかし、自己と社会の不正に向かって腹をたてることがなかったら、どうして人類は向上することができよう。貪ることは迷妄な欲望であるかもしれない。しかし、真と善と美とを貪り求めなかったら、どこに人類の文化が建設できよう。

三毒煩惱は肯定され止揚され浄化されるべきであって、否定され断絶されるべきではない。悟ってみれば、煩惱は本来菩提であったのである。」

(「無門関 第七則趙州洗鉢」『無文全集第五卷』山田無文著より抜粋)

有名な公案をご紹介します。

「無門関」の第一則に「趙州<sup>じょうしゅう</sup> 無字<sup>むじ</sup>」という有名な公案があります。

趙州和尚がある僧に、「犬に仏性がありますか？」と聞かれて「無」と答えた。

あるいは、白隠和尚の「隻手<sup>せきしゅ</sup> 音声<sup>おんじょう</sup>」の公案「(両手をたたけばぱーんと音がするが) さて片手の音を聞いてこい」

これらがまず修行僧が最初に与えられる課題、すなわち公案のひとつです。

先に、宋代の公案は、自分自身を突き詰めて「脱ける」そこに「悟り」がありましたが、公案は属性(普通は言葉で表現される)をどんどんはぎ取っていき、言葉が尽き、自分自身がバラバラに解けた所で自分自身の仏性を問うのです。

その人自身の「仏性」、あるいは修行するその人自身の「隻手の音」を聞くことを目指すのでしよう。

坐禅をして腹式呼吸ができたならば、祖師方の公案に限らず、自分自身のあり方、生き方、あるいは自分の中にある仏とは、と問いながら坐禅をするのも一興かもしれません。

(文責 中村彰利)